



特集

「小6②公立中高一貫校模試」

中学入試レポート

2020年以降の大学入試につながる、

公立中高一貫校の 「適性検査」問題を解く力

今回は、首都圏模試センターが2015年度から実施してきた、小6「公立中高一貫校模試」の第2回。この9月頃から各公立中高一貫校の学校説明会が行われ、受験生と保護者は、それぞれの志望校（＝受検校）を決めていく時期になる。そして、この時期から志望校の「適性検査問題」への対策学習も本格的になる。多くの志望者は、いまその受検準備と学習に励んでいる時期だろう。

そうしたお子さんの受検勉強のサポートと並行して、保護者はお子さんの小学校卒業後の進路を、あらためて真剣に考え、わが子にとってベストの受検準備をしていく必要がある。

折しも現在は、3年後の「2020年大学入試改革」を節目に、日本の教育が大きく変化しようとしている時期。現在の小6のお子さんたちが大学受験に挑むときには、まさにその変化に直面することになる。今回のレポートは、そうした変化も意識して、わが子にとってベストの進路選択をするための参考にしていただきたいと思う。

首都圏模試センター

公立中高一貫校の「適性検査」対策の 学習で身に着けられる力

東京都に初の公立中高一貫校として都立白鷗高等学校の附属中学校が開校したのが2005年。その後、今春2017年の4月までに、首都圏（ここでは東京・神奈川・千葉・埼玉と茨城）には、計24校の公立中高一貫校が誕生した。今春開校した横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中や、その前年2016年に開校した千葉県立東葛飾高等学校附属中の例をあげるまでもなく、それら24校の公立中高一貫校は、いずれも各地域の人気校として注目され、毎年多くの小学生が受験にチャレンジするようになっている。

たとえば今春2017年入試で、これら24校の「適性検査」に出願・受験した小学生数は、下の図のように、実受検者17,429名（志願者は18,059名）で、そのうち合格者はわずか3,040名。実際に受験した小学生のうち残り14,389名は、残念ながらこれら公立中高一貫校への入学希望はかなわなかったことになる。これは私立・国立中学校の入試と比べても、かなり厳しい“選抜”というべきだろう。

しかし、その厳しさも見つめたうえで、多くの小学生と保護者が公立中高一貫校に目を向け、そこへの受験を志したことは、お子さんの将来にとって決してマイナスではなく、いくつかの面で大いにプラスになる。

今春2017年首都圏中学入試の最注目校

横浜市立サイエンスフロンティア高附属中が開校！



そのひとつが、これら公立中高一貫校の「適性検査」にチャレンジするために、過去の問題と向き合って受検準備をしていく過程や、実際の「適性検査」本番で出題に取り組むときに、従来の学校教育の現場で主に行われてきた「履修範囲における習得知識の確認」というテストではなく、初めてみる素材も含めて「提示された知識や情報を読み解き、その場で考え、自分の意見や考えを表現する力」を問う性質のテストと正面から向き合い、自分自身の力で答えを導き出そうとする貴重な経験ができることと、それによって「正解がひとつではない問い」に立ち向かう力や、そうした学習姿勢や学習観を、親子で一緒に育てていけることである。

今春5月には文部科学省から、「2020年大学入試改革」で、現行の「大学入試センター試験」に替って導入される「大学入学共通テスト」の記述式のモデル問題が公表された（前回の本レポートでもご紹介した）が、それらの出題形式や、今後（2020

公立中高一貫校に合格する子どもはわずか

2017年入試/公立中高一貫校の 入試(適性検査)状況 (※一部推定)

- 志願者 18,059名 (+34名)
- 受検者 17,429名 (+17名)
- 合格者 3,040名 (+110名)
- 不合格者 14,389名 (-93名)

2017年中学入試はどうなったか？

私立中 国立中 公立中高一貫校合わせて、約57,000名(推定)

44,150名 首都圏の小学生の 6.6人に一人が 私立・国立中学を受検	17,429名 首都圏の小学生の 16.8人に一人が 公立中高一貫校を受検
---	--

首都圏の小学校卒業生数291,961名

首都圏の小学生の5.1人に一人が中学受験(受検)



年以降)の大学受験生に求める力には、まさに現在の公立中高一貫校の「適性検査」問題とも多くの共通点がある。

つまり、公立中高一貫校の「適性検査」をクリアすることを目標に学習を重ねることで身につける力は、現在の小学6年生が4年目の当事者となる「2020年以降の」新しい大学入試の対策にもつながる力であるということなのだ。

「中高6年間一貫教育」を知ることが、より良い学校選択につながる!

もうひとつのプラス面が、これらの公立中高一貫校をお子さんの志望校(→進学先)に考えたことから、お子さん自身と保護者の目が「中高6年間一貫教育」に向けられたことで、「わが子の教育環境」を考えるうえでの視野が広がったということである(学校選択の視点が増えた、視座が高まったということもできる)。

もとより、すでに全国各地に誕生している公立中高一貫校、なかでも「中等教育学校」と「併設型中学校」が開校の当初からめざしたのは、早くから私立中高一貫校が実現してきた「中高6年間一貫教育」のメリットと優位性、その成果などを、「良い点は見習う」スタンスで私学のノウハウを吸収したうえで、それを公立学校でも実現し、多く

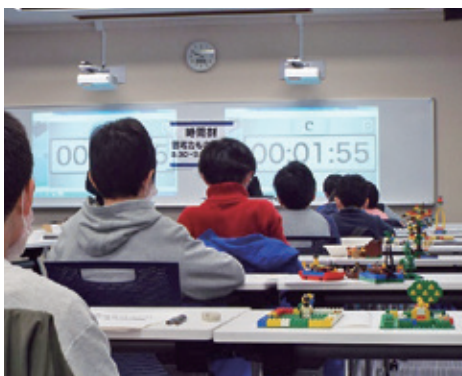


2017年入試では2月1日午後に行われた、宝仙理数インターの自己アピール型入試。この入試で、「多様な受験生との出会いが増えた」という。

の小学生に進路の選択肢として提供することになった。

そのため、多くは各地域や学区の公立高校のトップ校(もしくは準トップ校)に中学校を併設したり、あるいは高校募集を廃止して中等教育学校に改編するなどして開校された公立中高一貫校には、7年後には高いレベルの難関・有名大学へも十分に合格～進学が可能なだけの学習指導と、その進路実績への期待が寄せられた。そして、すでに中高一貫教育のもとで6年間を過ごした第1期生を卒業させた各公立中高一貫校では、期待を裏切らない高い進路(大学合格)実績を挙げた学校が多いといえるだろう。

おそらくはこの後に初めての中高一貫生を卒業させる(2012年以降に中学を開校した)公立中高一貫校でも、先行して中高一貫生を卒業させた数校に劣らない進路(大学合格)実績をあげることが予想される。これも公立中高一貫校の大きな魅力のひとつといえるだろう。



2017年入試では2月2日午後に行われた聖学院中の「思考力ものづくり入試」。課題に沿ってレゴで作品を作り150字ずつの記述を課すという、際立ってユニークな入試だ。

小学生の多様な資質と可能性を測る新たな入試



そして、もともとはこうした高い教育水準や進路（大学合格）実績への期待から、地域の公立中高一貫校をめざした小学生と保護者も、学校説明会などに参加して各校の教育内容（カリキュラムや各種の教育プログラム、課外学習など）を確かめていくうちに、「中高6年間一貫教育のメリットと優位性」についての知識が豊富になり、それをふつうの公立中学校と比較検討したり、あるいは私立中高一貫校と比較したりする視野や視点が広がってきたに違いない。

たとえば「2020年大学入試改革」以降に問わ

れる英語の力、つまり4年間の移行措置を経た後には、全面的に大学入試の英語の合否判定材料にそのスコアが使われるという英語の民間検定試験への対応を考えたときには、「中学3年間+高校3年間」に分断された現行の「3・3制」の公立中学・高校で英語の学習をするよりも、「中高6年間一貫教育校」で学習したほうが有効だということが理解できるはずだ。

中学時代に目の前の高校受験にとらわれることなく、ヒアリングやスピーキング、あるいは英語の長文読解やエッセイライティングの学習に時間

6月30日に朝日小学生新聞でも「多様化した私立中入試」がマンガ入りで紹介されている(編集協力・首都圏模試センター)。

を割くことのできる「中高一貫教育」のほうが、圧倒的に“先につながる＝将来の大学入試や社会に出たときに役に立つ”英語の力を育てやすいということは、すでに多くの教育関係者が語っている。伝統的に中高一貫教育の私立女子校のミッションスクールが「生きた英語

を使える」とか「英語に強い」と言われてきたことには、すでにそれらの女子校が、（早くは明治維新後や戦後の節目から）営々とこうした本来の「使える英語」教育を実践してきたという背景がある。

公立中高一貫校だけではなく、私立中高一貫校の教育（カリキュラムや教育展開）に少しでも目を向ければ、一般的な公立中学校では「週当たり英語授業」が「3～4時間」であることに比べて、

首都圏模試センターの「思考コード」で多様な中学入試の思考のレベルの特徴を知る

首都圏模試も偏差値以外の評価軸

変換操作	全体関係	変容 3	A3	B3	C3
複雑操作	カテゴリー	複雑 2	A2	B2	C2
手順操作	単純関係	単純 1	A1	B1	C1
(数)	(言語)		A 知識・理解思考 知識・理解	B 論理的思考 応用・論理	C 創造的思考 批判・創造

私立中学校の「英語の週あたり授業時間数」は平均でもおよそ倍の「6～7時間」行われてきたことを考えると、その優位性が感じられるはずだ。

この「英語の授業時間数の差」はほんの一例で、そのほかの教科の内容の進捗・深度や、理科や社会ならば実験やフィールドワークの時間数や機会の多さなどにも、やはり中学時代に公立中学校とは大きな差が生まれてくる。美術や音楽、技術（情報）な

どの授業における内容の深さも同様だろう。ほかにも電子黒板やノートPC、タブレットの活用などの「ICT教育」における内容や施設・設備なども、一般の（導入モデル校以外の）公立中学校との内容や導入までのスピード感の差は依然として大きい。

こうした教育の内容面での「中高6年間一貫教育ならではの」私立中学校と公立中学校との格差は、公立中高一貫校も含めた「中高一貫教育校」に目を向け、それらの学校の教育展開を保護者が詳しく知るほどに実感させられることになる。

それゆえに、もともとは公立中高

首都圏模試センターの「統一合判模試」の成績表にも「思考コード」の分類による「立体偏差値」が反映されている。



一貫校だけを志望校に考えていた小学生とその保護者が、やがては私立中高一貫校にも目を向けて、その教育内容の良さを感じて、それらの私学が導入している（あるいは新設する）「適性検査型（総合型・論述型・合科型・思考力型）入試」も併願受験するケースが増えているのである。

公立中高一貫校の「適性検査」と多様な私立中入試で問われる力を「思考コード」で読み解く

首都圏模試センターの推計では、今春2017年入試で、これら私立中学校の「適性検査型（総合型・論述型・合科型・思考力型入試などを含む）入試」を実施した私立中は「120校」に上り、来春2018年入試ではこれを「20～30校」上回ることが予想されている。

思考コードとは？

交換操作	全体関係	実答3	配点 18 得点 6 正答率 33.3	A3	配点 7 得点 7 正答率 100	B3	配点 7 得点 7 正答率 100	C3
複雑操作	カテゴリズ	複雑2	配点 22 得点 25 正答率 55.0	35	配点 25 得点 29.4 正答率 117.6	68		C2
手順操作	単純関係	単純1	配点 40 得点 49 正答率 122.5	49	配点 85 得点 85 正答率 100	48		C1
(数)	(言語)			A	B	C		
				知識・理解思考	論理的思考	創造的思考		
				知識・理解	応用・論理	批判・創造		

※この成績（思考コード）の表示は、4ページ目をご覧ください。

そして、これら私立中学校の「適性検査型入試」はもちろん、それ以外の名称の新たなタイプの入試は、いずれも公立中高一貫校だけをめざして「適性検査」の対策のための受験勉強（私立中対策の4科目型の受験勉強ではなく、塾では国・算の2科目型で受験勉強をしてきたケースも多い）をしてきた小学生や、習い事やスポーツに励んできた小学生にとっても、「受験しやすい」形態やコンセプト

実際の入試や模試の問題（適性検査をはじめ、私立中の適性検査型・総合型入試、思考力テスト）で主に出現される問題も「思考コード」に当てはめて分類・分析することができる

最難関模試 ⇔ 御三家&難関校

交換操作	全体関係	実答3	A3	B3	C3
複雑操作	カテゴリズ	複雑2	A2	B2	C2
手順操作	単純関係	単純1	A1	B1	C1
(数)	(言語)		A	B	C
			知識・理解思考	論理的思考	創造的思考
			知識・理解	応用・論理	批判・創造

思考力テスト

交換操作	全体関係	実答3	A3	B3	C3
複雑操作	カテゴリズ	複雑2	A2	B2	C2
手順操作	単純関係	単純1	A1	B1	C1
(数)	(言語)		A	B	C
			知識・理解思考	論理的思考	創造的思考
			知識・理解	応用・論理	批判・創造

統一合判 ⇔ 中学受験スタンダード

交換操作	全体関係	実答3	A3	B3	C3
複雑操作	カテゴリズ	複雑2	A2	B2	C2
手順操作	単純関係	単純1	A1	B1	C1
(数)	(言語)		A	B	C
			知識・理解思考	論理的思考	創造的思考
			知識・理解	応用・論理	批判・創造

公立一貫模試 ⇔ 適性検査型・総合型

交換操作	全体関係	実答3	A3	B3	C3
複雑操作	カテゴリズ	複雑2	A2	B2	C2
手順操作	単純関係	単純1	A1	B1	C1
(数)	(言語)		A	B	C
			知識・理解思考	論理的思考	創造的思考
			知識・理解	応用・論理	批判・創造



特集 2020年以降の大学入試につながる、公立中高一貫校の「適性検査」問題を解く力

「たとえばどんな問題？」……フランススコ・ザビエルを題材にした「思考コード」の各領域の出題例

変換 操作	全体 関係	変容 3	ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて選び年代の古い順に並べなさい	キリスト教の日本伝来は、当時の日本にどのような影響を及ぼしたか、200字以内で説明なさい	もし、あなたが、ザビエルのように知らない土地に行って、その土地の人々に何かを求めようとする場合、どのようなことをしますか、600字以内で書きなさい。
複雑 操作	カテゴリー	複雑 2	ザビエルがしたこととして正しい選択肢をすべて選びなさい	キリスト教を容認した大名を一人あげ、その大名が行ったこととその目的を100字以内で説明しなさい	もし、あなたがザビエルだとしたら、布教のために何をしますが、具体的な根拠と共に400字以内で説明しなさい。
手順 操作	単純 関係	単純 1	(ザビエルの写真を見て)この人物の名前を答えなさい?	ザビエルが日本に来た目的は何ですか? 50字以内で書きなさい	もし、あなたが、ザビエルの布教活動をリポートするとしたら、ザビエルに対してどのようなサポートをしますか、200字以内で説明しなさい。
(数)	(言語)		A 知識・理解思考	B 論理的思考	C 創造的思考
			知識・理解	応用・論理	批判・創造

トの入試がほとんどであることにも注目すべきだ。

そして実際に今春2017年入試では、これら「120校」の私立中の「適性検査型入試」に、約8,000名もの受験生がチャレンジした。来春2018年入試では、この受験生がさらに1,000名以上増えることが予想されている。

ところで、昨年から首都圏模試センターの模試に導入され、今年度からは個々の受験生の成績表にも出力(掲載)されるようになった「思考コード」(P16～18ページ)についてご紹介しておきたい。

この「思考コード」は、それぞれの模試で出題される個々の問題ごとに「問われる力」を、この表

のように分類し(作問の段階でそれぞれの問題が問う力を、この「思考コード」に基づいて設計し)、それぞれの領域(升目)の力ごとの正答率や偏差値を算出して、受験生一人ひとりの強みや弱点(課題)などの学力特性を表す形で成績表にも表現したものだ。そして首都圏模試センターではこれを、「立体偏差値」とも呼んでいる。

詳しい説明をするには誌面が足りないが、ここでは、例月の「統一合判模試」の問題や、難関私立中の(難易度の高い)入試問題、公立中高一貫校の「適性検査」問題、私立中の「思考力入試」で問われる範囲を示した図を17ページにご紹介しておこう。

比べてご覧いただくと、それぞれの入試(模試)タイプで問われる力の範囲が、かなり明確に異なっていることが理解できるだろう。

たとえば、公立中高一貫校の「適性検査」や、私立中の「思考力入試」では、たて列の「A領域(=知識・理解)」の力が問われるのではなく、「B領

大学入試改革を先取りした中学入試の変化



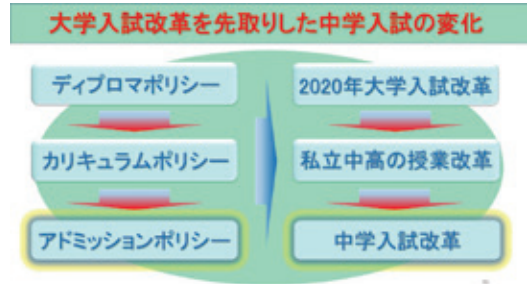
域（＝応用・論理）」や、学校によっては「C領域（＝批判・創造）」の力が問われることになる。

そこにチャレンジする受験生（受験生）としては、それぞれの入試に挑むための学習の仕方や学力観も、一般的な私立中入試とは異なるものとして理解しておくが良い。

この「思考コード（＝立体偏差値）」と、それぞれの領域に当てはまる出題を、多くの日本人が知っているフランシスコ・ザビエルを題材に例示したものが18ページの表だ。このような形でご覧いただくと、イメージもしやすくなることと思う。

2020年以降の新たな大学入試にもつながる「適性検査」・「適性検査型」問題を解く力

さらに「2020年大学入試改革」を節目に大きく変わる今後の大学入試で問われる力を、この首都圏模試センターの「思考コード」にあてはめてみると（下の図）、文部科学省が示している図と、



ぴったりと重なる。

つまり、公立中高一貫校の「適性検査」の出題や、私立中の「思考力入試」をはじめとした多様なスタイルの入試が問う力は、すなわち、いまの小学生が4年目以降の当事者となる、今後の新たな大学入試で問われる力ということになる。

そういう意義も知っていただいたうえで、今後の受験勉強や日常の学習を進めていただくと、お子さんの7年後の大学入試と、その先の社会でも役立つ力を、この過程で育てていくことにつながる事が理解でき、今後の学習の励みになるのではないだろうか。

